本のある居心地の良い空間を演出する

―空間構成とサービスから見たブックカフェの事例分析―

高橋 怜奈

１．ブックカフェをめぐる背景

現在、日本では年間７万点から８万点の本が出版されている。ネット社会が進展し、膨大な出版物や情報にあふれる一方、書店に並んでいる本はどこも同じような品揃えの店が多く、何となく物足りないと感じる人が増加した。そこで、自分の関心のあるテーマや趣味、嗜好にあった店に行きたいというニーズが増え、それに応えるものとしてブックカフェが誕生したとされる[1)]。

ブックカフェが増えている背景として、1995 年から 2015 年までの 20 年間に毎年 300～500 店のペースで新刊書店が閉店したこと、書店経営者の高齢化や後継者不足、電子書籍の普及による紙の本とそれを販売する書店へのニーズの減少傾向が挙げられる。地元に新刊書店がない自治体は全体の５分の１にあたる 332 市町村ともいわれる[2)]。

ブックカフェは開業しやすい業種でもある。カフェの営業は飲食店営業になるが、読書しながら喫茶を楽しめるという点で、本とカフェは相性が良く、本棚を設置するだけでもブックカフェと呼ぶことができる。そのため、比較的低予算での開業が実現可能である。また、ブックカフェは希薄化する人間関係と孤独から、新たな居場所を求める人々のサードプレイスとしての場所となっている。

このように、ブックカフェは身近な存在として広まりつつあるものの、これを対象とした研究は、個別の建築事例[3)]、読書会の実践事例[4)]などを取り上げたものがあるのみである。本論考では、複数のブックカフェを題材として、空間構成とサービスの両方の観点から、本のある居心地の良い空間を演出する要素について比較考察する。

２．ブックカフェの業態と工夫

ブックカフェの業態[5)]は、分類すると次の３パターンに分けることができる（図 1）。

1. 新刊書店とカフェが併設
2. 古本屋がカフェを併設
3. 閲覧のみのカフェ

図１　ブックカフェの業態

第一は、商業施設などにカフェと書店が併設されている場合である。企業同士が業務提携したり、一つの企業が新しくカフェや本屋を併設したりする場合が多い業態である。

第二は、もともと古本屋だった店舗にカフェを併設する場合である。新刊書を扱う場合に比べ、価格の自由度が増し、特定のジャンルや分野に沿って本をそろえることが多い。

第三は、扱う図書が希少価値の高いものが多いとき、在庫を抱えたくないときにとられることが多い形態である。本を販売しないため在庫コストはかからないが、収益源が減ってしまうというデメリットがある。

ブックカフェは、利用客の滞在時間が長いため、回転率が悪い。飲食店の売上は、「席数×回転率×客単価」が基本であるが、長時間の利用客は単価や回転率を下げるため、歓迎はされない。そのため、客単価を上げることに加え、ブックカフェ以外の収入源を検討すること、読書会の実施やネットで本の販売などの対応策が練られている。

このような試行錯誤の上、居心地の良い場所・時間を提供しているブックカフェの事例として、東京都渋谷区初台にある「本の読める店 fuzkue（フヅクエ）」が挙げられる。店内は書籍が陳列され、席料が発生するビジネスモデルとなっている。マンガ喫茶のような単純な時間制課金ではなく、飲食物を注文するごとに席料が小さくなる仕組みである。快適な読書環境のために、メニュー表にはお店のコンセプトや客が守るべきルールが 10 ページ以上記されている。どのような注文でもおおよそ客単価が 2000 円になるように設定されている。「書店×カフェ＋α」の事例と言えるだろう。

３．空間における居心地を追求するブックカフェの設計

ブックカフェを設計する際に、空間における居心地を追求する建築の観点からは、次の３点が重視される（図 2）。

1. 適度な明るさ
2. 人との距離感
3. 座り心地の良い椅子

図２　居心地を重視したブックカフェの設計要件

第一に、「適度な明るさ」が挙げられる。ブックカフェでは本を読むことが主要な目的になるので、本を読むための最低限の明るさを確保する必要がある。それだけでなく、空間の表情を左右するのが照明である。使用目的や規模によって安全で快適な照明計画を行う。（図 3）。

1.光束　照明から出る光全体の明るさを示す。単位：ルーメン (lm)
2.照度　光が当たっている面の明るさの度合い。単位：ルクス(lx)
3.輝度　照明から出る光に直接照らされた面積。単位：cd/m2
4.演色性 光によって照らされたモノの色の見え方に影響を及ぼす。
単位：主に平均演色評価数(Ra アールエー)
5.色温度 ある光源が発している光の色を定量的な数値で表現する尺度。
K が低いと赤みが強い色合いとなり、高いと青白い色になる。単位：ケルビン (K)

図 3　照度計算の項目と単位

例えば、バーは恋人や一人で落ち着いた雰囲気で過ごす場所なので、100lx 前後が適切な明るさとなる（厨房部分は 300lx）。図書館やカフェでは、リラックスできる雰囲気を演出する場合、客席の照明の明るさは 500lx 前後である（住宅の勉強部屋、作業部屋は 300lx）。レストランは、家族や友人で楽しめる明るい雰囲気にするため 500～700lx 前後の明るさで設計する。

明るさだけではなく、照明の色も重要である。これは「色温度」とも呼ばれ、光の色合いのことである（単位は K（ケルビン））。色温度を使い分けることで、理想の雰囲気を作り出すことができる。K の数値が高いほど白系色になり、低いほど赤系の色合いになる。色温度の設計により空間の雰囲気は大きく変わる。色温度は、色彩照度計を使ってはかることができる（最近ではスマホのアプリでも計測可能）。

ブックカフェの空間的な快適さを重視した設計要件の第二に、「人との距離感」が挙げられる。隣席の人との対人距離、店員との距離を考慮して設計する必要がある。

対人距離とは、心理的・情緒的な意味から見た人と人との快適な距離のことである。隣のテーブルとの間の幅がやや広めだとストレスを感じにくい。しかし、客席を多く設ける場合はこの幅が狭くなるように計画する。特に都内だと客席面積が広く取れず、回転率や売上も考えると実際には 1 人 1 坪も取れないような場合も多い（例外的に、ゆとりのある対人距離を取っているところもある）。

客席面積における席数の目安は、標準型席では 2.2～2.5 席/坪、ゆったり型席では 1.5～1.8 席/坪である。1 坪当たりの席数の目安は、高級専門店やレストランなど、ゆったりとした座席配置の店舗では 1 坪当たり 1 席、一般的な店舗では 1 坪当たり 1.5～2 席、大衆型店舗では 1 坪当たり 2.5~2.7 席である。

ブックカフェの空間的な快適さを重視した設計の第三の要素として、「座り心地の良い椅子」が挙げられる。ブックカフェでは、長時間座った状態で過ごすことが想定される。人間工学の観点から、長時間でも身体に負担なく、快適に座るための椅子が必要となる。

家具の扱いやすさはその形状、構造、材質、置かれている場所との関係、扱う人の身体的条件などによって決まる。インテリア空間の計画における人間工学的な観点として、次の３点が重視される（図 4）。

1. 機能的要素
2. 審美的要素
3. 管理的要素

図 4　人間工学的に重視されるインテリア空間の要素

第一の「機能的要素」とは、椅子に座る、書く、しまうといった家具本来の使い勝手の要素のことである。

第二の「審美的要素」とは、家具を美的対象物としてとらえる場合に、備えるべき要素のことであり、色やデザイン性を重視する。

第三の「管理的要素」とは、配置、移動 、運搬、収納などの管理的操作に関する要素である。

特に人間が過ごしやすく、座り心地が良いと感じる第一の「機能的要素」と第二の「審美的要素」は家具の制作や購入時に必ず配慮される要素であり、科学的あるいは工芸的立場からの検討が積み重ねられてきた。例えば、人間工学の観点から見た机と椅子の座面は次の計算式により身長から理想の高さを算出することができる（図 5）。

・椅子の高さ＝身長×0.25 －1
・机の高さ＝身長×0.25－1 ＋身長×0.183 － 1

図 5　人間工学に基づく理想的な机と椅子の座面の高さ

以下では実際にあるブックカフェを事例に、ブックカフェの空間構成やサービスの仕組みを分析する。

４．事例分析

4.1　事例（1）BUNDAN

BUNDAN[6)]は、東京都目黒区駒場の日本近代文学館内にあるブックカフェであり、日本初の近代文学総合資料館に設置されたカフェでもある。BUNDAN が他のブックカフェと異なる点は、森の中にあり、国の重要文化財がごく近距離圏内にあることである。2012 年に開業、株式会社 BAKERU が運営している。

日本近代文学館は、明治以降の文学者を対象に広く文学資料を収集・保存する施設である。敗戦から立ち直り経済成長へ向かう中で、文学資料が散逸しつつあることを危惧した高見順や川端康成といった作家や研究者らの呼びかけにより 1962 年 5 月に設立準備会が結成、各界の援助を得て 1963 年 4 月に財団法人日本近代文学館が発足した。図書や雑誌を中心に、名作の原稿も含め、120 万点の資料が収蔵されている。近隣には有形文化財に指定されている旧前田邸洋館と、重要文化財の旧前田邸和館がある。

日本近代文学館は竹中工務店が設計・施工を行い 1966 年に竣工、1967 年に開館、公益財団法人 日本近代文学館が運営している。鉄筋コンクリート造 3 階の建物で、外観も内観も水平、垂直が特徴的である。外観は、ルーバーの光と影が庇と連続窓を思わせるファサードが特徴で、晴れた日には影がストライプの模様に見える（写真 1, 2, 3。いずれも筆者撮影）。

写真 1

写真 2

写真 3

以下に、日本近代文学館より提供していただいた図面（図 6）を掲載する。図で「喫茶室」と書かれているところに BUNDAN がある（元々は食堂だった）。

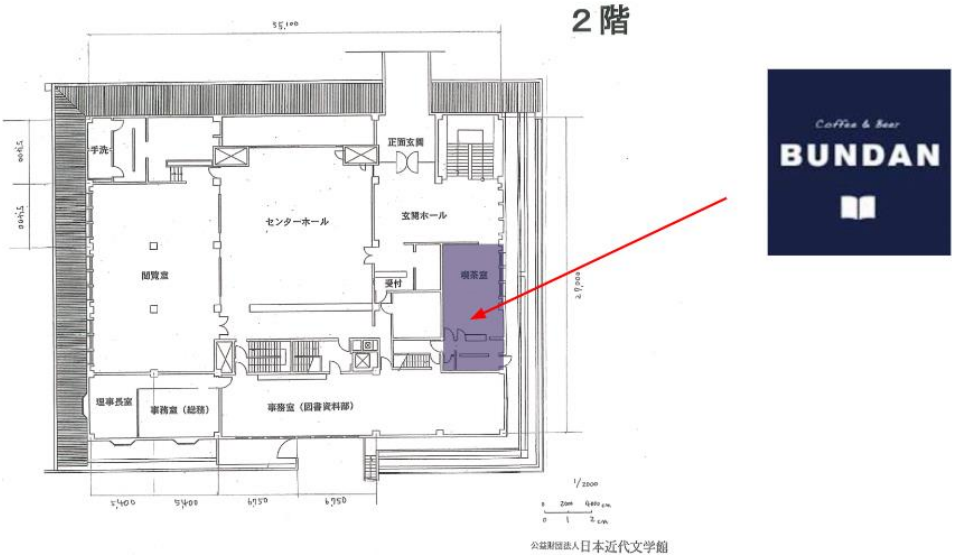

図 6　日本近代文学館 2 階の図面（日本近代文学館提供）

BUNDAN の特徴は以下のようにまとめられる（図 7）。

① 2 万冊が収められているブックカフェ
② メニューが近代文学の作家や作品にまつわるもの
③ 蔵書の持ち主はオーナー草彅洋平さん

図 7　BUNDAN の特徴

第一に、2 万冊の蔵書を持つブックカフェであることだ。書籍の販売は、レジ横のディスプレイに陳列されているもののみで、店内にある書籍は閲覧のみとなっている（写真 4, 5, 6。いずれも筆者撮影）。

写真 4

写真 5

写真 6

右の図 8 は喫茶室の部分を拡大したものである。客席を囲む形で本棚が配置されている。色をつけた箇所が本棚と本が並べられている部分で、多くの本に囲まれながら飲食を楽しむことができる。一人で利用する場合は、厨房側（図の下側）の大きなテーブルに案内されて相席になる。照度は低めで、落ち着いた雰囲気である。

その他、厨房と客席を分けた配置計画、柱間に本棚を配置、家具やテーブルは文豪の所有物だったものが寄贈されている、といった特徴がある。

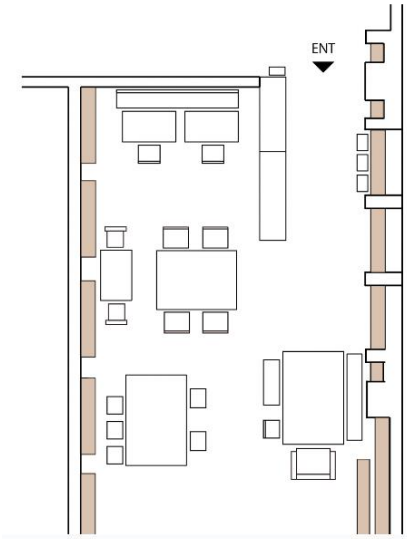

図 8　BUNDAN 店内図

第二の特徴として、メニューが近代文学の作家や作品にまつわるものとなっている点が挙げられる。ひとつひとつに、そのメニューにまつわるエピソードや文学作品から抜粋した文章が添えられており、作品世界をイメージしながら楽しむことができる。近代文学館内にあるからこそ、より作品の世界観を感じられるような工夫となっている。机と椅子は、

文豪の豊島与志雄が実際に使用していたもので、遺族から寄贈され、実際に着席可能である。その他の気に入った家具は購入することもできる。

BUNDAN の第三の特徴として、陳列されている蔵書が、カフェのオーナーである草彅洋平氏の個人蔵書だという点が挙げられる。草彅氏が、自分が読み終わった本を本棚に加えていき、部屋 1 つ分の書籍を運び込んだ。それが天井近くまで配置されており、独特な世界観を作り上げている。このように、増殖し続ける書棚は、訪問する度に新しい本が増えて、新しい発見があるかもしれないという魅力を持つことになる。

書棚には、出版社や作家ごとに分けて書籍が収納されており、棚の木口にラベルがあって見つけやすいよう配慮されている。厨房側に梯子があるので天井近くに置かれた本も閲覧可能ではあるが、利用客のほとんどは手の届く範囲の本を読んでいるように見受けられる。アンティークな和テイストながら、洋風にも感じられる書棚の配置で、アムステルダム国立美術館の図書館を思わせるような海外の図書館のような雰囲気も感じられる。

4.2　事例（2）文喫

文喫 [7]は、文化を喫する、入場料のある本屋として東京都港区六本木の青山ブックセンター跡地に 2018 年 12 月に開業したブックカフェである。Soup Stock Tokyo や 100 本のスプーンなどの飲食店で知られる株式会社スマイルズが、業態開発からロゴデザイン、店舗設計、飲食プロデュースまでを担当した。事業主は日本出版販売株式会社、運営は株式会社リブロプラスが担っている。席数は90席である（写真7, 8）。

写真 7（筆者撮影）

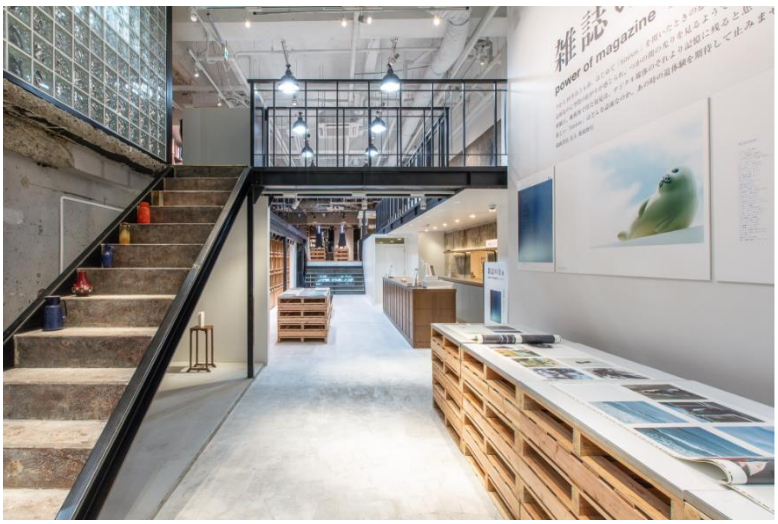

写真 8（「文喫」公式サイトから転載）

文喫は、「本と恋する場所」をコンセプトとして、次のような特徴を持っている（図 9）。

① 入場料ありのブックカフェ
② 人文科学や自然科学からデザイン・アートの約 3 万冊の書籍を所蔵・販売
　→選書サービスがある
③ 企画展を定期的に開催している

図 9　文喫の特徴

第一に、入場料ありのブックカフェという点である。2023 年 8 月現在、入場料は税込 1,650 円（土日祝は税込 2,530 円）であり、追加料金なしで 1 日滞在することも可能である。店内にある全ての本が購入できる。

空間構成としては、①選書室、②閲覧室、③研究室、④喫茶室、⑤展示室の 5 つのエリアに分かれている（図 10）。

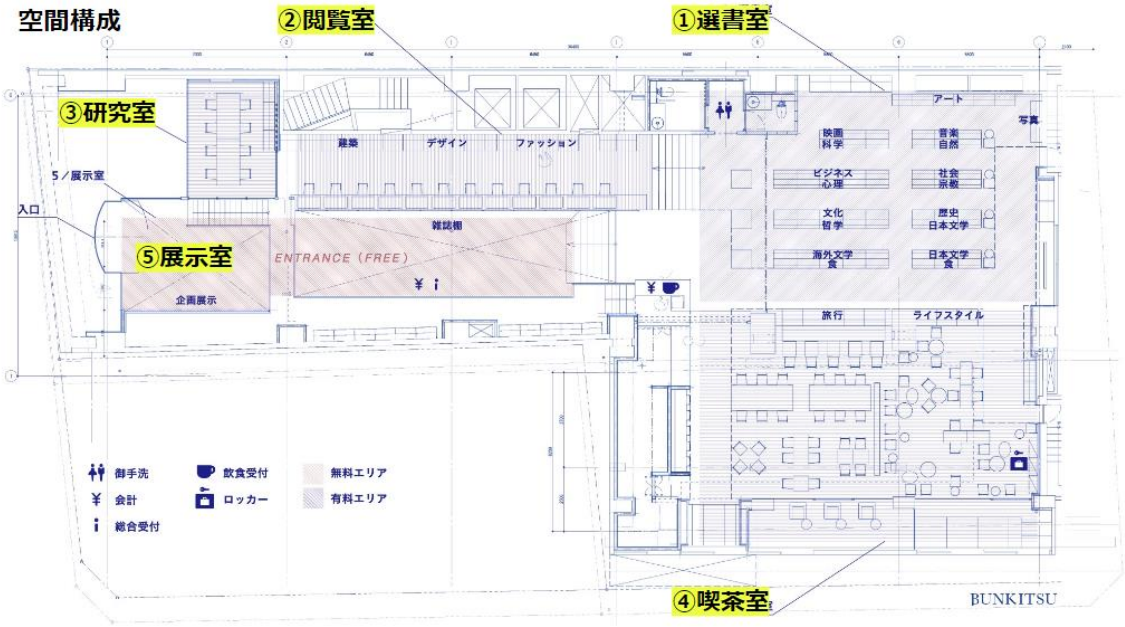

図 10　文喫の空間構成（「文喫」公式サイト「店内地図」[8]をもとに作成）

右の図 11 は、書棚の位置を黒い四角で強調したものある。同じ幅の本棚が配置されているのが特徴である。文喫は、前出の BUNDAN とは違った図書館のような空間構成で、エリアごとに特色がある。ゆとりのある客席で、家具の配置は対人距離にほとんどストレスがない。

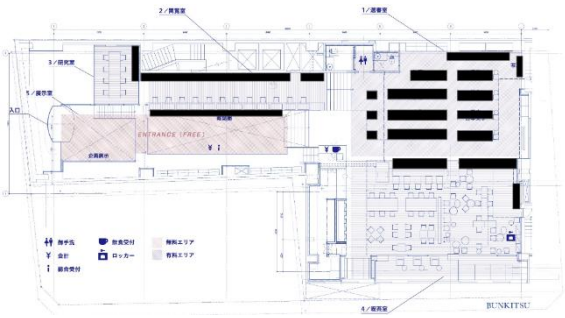

図 11　文喫の書棚の配置

文喫の第二の特徴は、約 3 万冊の書籍を所蔵・販売している点である。さまざまなジャンルの本が置かれており、1 冊も同じものはない。スタッフが面白いと思った本や、他の書店では見つけにくい個性的な本を仕入れている。雑誌はバックナンバーも数多く揃えられており、図書館のように豊富である。

また、他のブックカフェにはない特徴として、選書サービスがある。来店の 2 週間以上前までにテーマやジャンル、本の好みや利用シーンを伝えると、文喫のスタッフが 3 冊以上を選定してくれるシステムで、自分の関心のある分野でありながら、普段自分で選ばない本との出会いが高まる仕組みとなっている。1 冊 1 冊スタッフからの手書きコメントが書かれた栞が本に挟まれていている。気に入った書籍はすべて購入することができる。

文喫の第三の特徴は、企画展を定期的に開催している点である。入口から店内まで比較的長いエントランスが続き、企画展示コーナーとなっている。ビジネスの最先端でもある東京・六本木という街で、書店を生業とする文喫ならではの視点で、企業の商品やサービスに新たな価値を付与する企画展を行っている。入口の企画展を定期的に開催することで集客や本の購入促進にも繋がっている。

4.3　事例（3）本と珈琲 梟書茶房

東京都豊島区西池袋にある「本と珈琲 梟書茶房」[9]（以下「梟書茶房」）は、池袋駅直結のショッピングビル「Esola 池袋」の 4 階にある。大手コーヒーチェーン「ドトール」と神楽坂の書店「かもめブックス」が共同で設置したブックカフェである。ドトールの菅野眞博は「珈琲」を、かもめブックスの柳下恭平は「本」を担当した。2017 年に開業、株式会社ドトールが運営している。内装設計・施工は D&N レストランサービスの塀内裕子、谷内喜彦、高田宗則が担当した（写真 9　梟書茶房公式サイトより転載）。

写真 9　梟書茶房

梟書茶房の特徴は以下のようにまとめられる（図 12）。

① 店内で自由に読める約 1,000 冊の書架
② 購入するまで内容がわからないシークレットブックの販売
③ ゆとりのある客席とデザイン性の高い家具や空間

図 12　梟書茶房の特徴

第一に、梟書茶房はショッピングビル 4 階フロア全体がブックカフェになっている。図 13 は梟書茶房の店内図である。

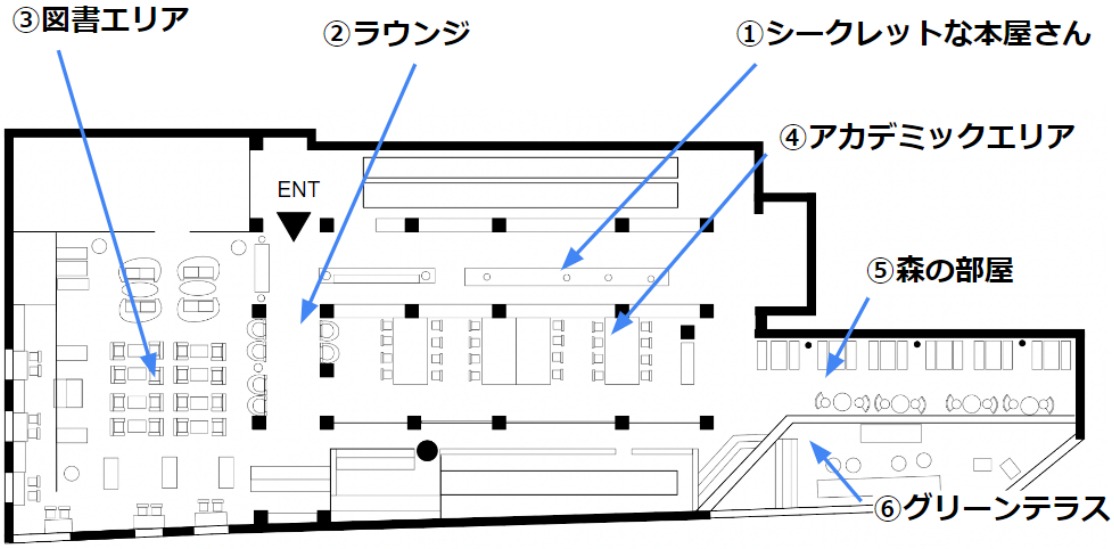

図 13　梟書茶房の店内図（梟書茶房公式サイトの店内マップ[10]をもとに筆者作成）

店内は 6 エリアに分かれており、柱で空間を分け場所を強調している。BUNDAN（2 万冊）、文喫（3 万冊）と比較すると、規模の割には本が少ない（閲覧用 1,000 冊、販売用 2,000 冊）ように思われるが、客席と物販のスペースが広くとられている。

先に挙げた文喫や BUNDAN と比較すると窓が多く、店内は明るい雰囲気である。内装がヨーロッパを思わせるような意匠性に優れたブックカフェである（写真 10）。

写真 10　梟書茶房店内（梟書茶房公式サイトより転載）

第二の特徴として、販売用の図書は、購入するまで内容がわからないシークレットブックになっている点が挙げられる。写真 10 の右側に見える書棚と左側の陳列台の上に販売用の図書が並べられており、すべての本にカバーがされて、本のタイトルがわからないようになっている。本には推薦文がつけられていて、その推薦文を頼りに購入を検討するというシステムである。購入意欲を促進する、一冊の本との出会いが演出されている。店内に入ると写真 11 のような鍵が渡されて、退出時にレジで渡して飲食と購入図書の会計を同時にする仕組みになっている。

写真 11（筆者撮影）

第三の特徴は、ゆとりのある客席とデザイン性の高い家具や空間である。入口はホテルのレストランのような雰囲気でアーチ型の R 垂れ壁が奥行きを出しており、天井が高く空間に広がりがあるように見える。

梟書茶房は、閲覧用の図書コーナーよりも客席部分を広くとっていて、一人一人の客席面積が広いため、ゆったりと過ごすことができる。中央のキッチンカウンター前の「アカデミックエリア」は一人で本と向き合う場所となっているが、その他のエリアは二人席が多く、ほとんど二人掛けの家具の配置である。本を見て会話を楽しめるようになっている。また、エリアごとに違った世界観があり、空間が分離されているがシックなデザインで統一されているため空間に一体感がある。

3 つのブックカフェの事例から空間構成とサービスの違いを以下のようにまとめることができる（表 1）。

	1.BUNDAN	2.文喫	3.梟書茶房
空間構成	・書棚が席を囲う ・どこにいても書棚にアプローチできる ・レトロな和な雰囲気を演出しながらもシンプルなデザイン	・書棚が点在し、空間が用途やジャンルによって分離した図書館に近いブックカフェ	・書棚は店舗の中心に配置され、空間はエリアごとにテイストが違う ・一人一人の客席面積が広い
サービス	・家具の体験ができる→購入可能 ・文学にちなんだ個性的なメニュー	・入場料のあるブックカフェ ・スタッフによる選書サービス ・企画展示等、クリエイティブな要素が多い	・一人用のアカデミックエリアで静かに本を楽しむことも、二人席で会話を楽しむこともできるカフェに近いブックカフェ ・シークレットブックの販売

表 1　3 つのブックカフェの空間構成とサービスの比較

５．まとめと展望

ブックカフェの空間構成としては、①ゆとりのある客席面積、②ほどよい対人距離、③柱間を利用した書棚の大きさ選定が多い。また、ブックカフェのサービスとしては、本との向き合い方にエンタメ性があること、店側が細かいルールを徹底して作り、世界観を作りあげていること、席料や入場料を設けることで長時間の滞在でも運営が継続可能なことが挙げられる。こうした仕組みは、利用客にとって新たな興味の入口に繋がるものでもあるだろう。

今後のブックカフェの展望として、3 つの可能性を指摘しておきたい。第一に、すでにファミリーレストラン等で導入されているようなサービス系のロボットの登場により、ロボットがいるような空間づくりが展開し、無人化が進むことが考えられる。その場合、空間構成としては、ロボットが動けるような通路幅や動線の確保が必要となる。第二に、ブックカフェは比較的開業しやすいため、空き家やマンションの一室などで個人所蔵書の非売品の図書を閲覧できる会員制のブックカフェが現れるかもしれない。そして第三に、電子書籍等のデジタル媒体の出現により、書棚を配置しないかたちで運営されるブックカフェが登場する可能性も考えられる。いずれにしても、個性的な読書体験ができる場として、ブックカフェの空間構成とサービスは今後も新たな取り組みが展開されていくだろう。

注・参考文献

1) 日本ブックカフェ協会「ブックカフェとは」
https://www.bookcafe-japan.org/ブックカフェとは/（2023 年 8 月 29 日参照）
2) 毎日新聞 2015 年 2 月 27 日付
3) 菊地宏建築設計事務所「ブックカフェ：設計」『新建築』96（11）, 2021, pp.151-155
4) 依岡隆児, 星野凜「ブックカフェという「場」における読書会について：地域における読書振興活動の観点から」『言語文化研究』28, 2020, pp.165-180
5)日本ブックカフェ協会 https://www.bookcafe-japan.org/（2023 年 8 月 29 日参照）
6) BUNDAN　http://bundan.net/（2023 年 8 月 29 日参照）
7) 文喫　https://bunkitsu.jp/（2023 年 8 月 29 日参照）
8) 文喫の店内図　https://bunkitsu.jp/store/（2023 年 8 月 29 日参照）
9) 梟書茶房　https://www.doutor.co.jp/fukuro/（2023 年 8 月 29 日参照）
10) 梟書茶房　店内図　https://www.doutor.co.jp/fukuro/map_fukuroshosabo_esola.html
（2023 年 8 月 29 日参照）